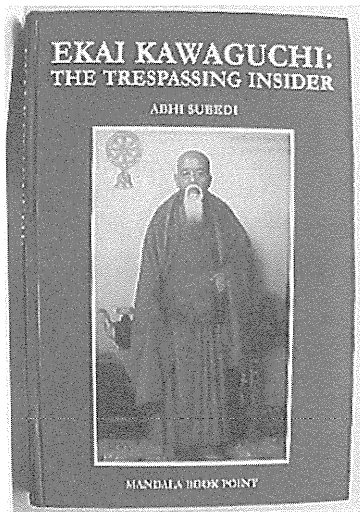


書評：高山 龍三

*Ekai Kawaguchi :  
The Trespassing Insider*

Abhi Subedi著

Mandala Book Point, Kathmandu  
1999年刊 14.6×22cm xvii+175p.



外国人による河口慧海についての本は、Scott Berry 氏の *A Stranger in Tibet* (Kodansha International) について、しかも慧海ゆかりの地のネパール人学者による、初めての本である。ベリー氏の本の出版には、チベット文化研究所ペマ・ギャルポ所長と私が国際交流基金に出版助成の推薦をしたが、著者スベディ氏には私は研究協力をし、その成果が実ったことを喜ぶものである。

著者はネパールの国立総合大学であるトゥリプヴァン大学文学部英文学学科主任教授、私との初めての出会いは、1996年、カトマンズのホテルで、私の河口慧海の旅と一生に関するスライドを使っての講演に見えたときである。友人の民俗学者・詩人のトゥラシ・ディワス・ジョシー教授の紹介であった。当時駐ネパール日本大使館の菊池法

純参事官の助言も受けて、1997年度国際交流基金の研究者として来日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で石井溥教授のもと、一年近く河口慧海の研究をされた。その間、私はスベディ夫妻を河口慧海の生誕地、堺市博物館、黄檗宗萬福寺に案内、また何度か彼と私の研究室で資料を紹介、説明し討議した。また慧海の姪宮田恵美さんを含む関係者に紹介した。

彼は日本滞在中、精力的に多くの人々に会い、慧海ゆかりの地を訪れた。この本の中に研究者との討議を記録し、慧海の生まれた堺の百年前の町並みを、生き生きと描いている。英語文献はもちろん日本語文献も翻訳してもらって読み、原稿をつくられた。98年99年の私のネパール国立古文書館での慧海献上一切経調査には、協力していただいたことを感謝している。そしてこの度その成果がこのきれいな本になって、国際交流基金の助成を得て、ネパールで出版された。

副題の「侵入する内部の人」というのは、慧海がネパール・チベットに密入国し、長く滞在してよく観察し、土地の人と交流したことをさすのであろう。序論では慧海研究のいきさつ、とくに著者の日本での人間関係を述べ、以下、1. 独立の探検僧、2. 境なき辺境、3. 伝統をもつ聖なる漂浪者、4. 詩を求めると化身、5. 博物館と精力、6. 実行する僧という章が並ぶ。

ベリーの本のように、慧海の旅に多くをさかず、スベディ教授は慧海のコレクション（主として東北大学東洋・日本美術史研究室所蔵）、慧海がネパールのチャンドラ・シャムシェル大王（総理大臣）に提出した「覚書」をとりあげ、慧海の多面的な人間像を描く。

また著者自身詩人、芸術評論家でもあることから、日本ではあまり評価されない慧海の和歌について論じている。日本文化に造形も深く、俳句や能についての著作もある著者は、空海、良寛、芭蕉から、うじき

つよし（NHKのドラマで河口慧海を演じた俳優）まで論じる日本文化論ともなっている。

今まで国際的にとりあげられ、論じられてきた慧海は、彼の『チベット旅行記』の英訳本 *Three Years in Tibet* によってであった（拙著『河口慧海』6章参照）。この本によって、河口慧海の全人間像がネパール人に、あるいは国際的によりよく理解されるようになるのではないか。

ただ残念ながら文中とくに巻末の文献、索引の日本語表記に誤りが多くみられる。教授の日本語理解は無理としても、校正を日本人の友人に見せて、チェックをされるべきであった。教授夫妻の撮られたカラー写真のほか、河口慧海コレクション（東北大）のカラー写真・モノクローム写真（許可を得て『河口慧海請来チベット資料図録』からの）が多く挿入されている。